

<論説>パリ・コミューンとジャコバンたち

著者	小牧 近江
雑誌名	社会労働研究
巻	11
号	4
ページ	15-29
発行年	1965-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017669

パリ・コミュニケーションとジャコバンたち

小 牧 近 江

大仏次郎は精魂こめた、その著「パリ燃ゆ」（上下二巻、朝日新聞社版）をみごと完成した。まことに慶賀のいたりにたえない。この大事業を成しとげた著者はほっとし、「ペンを握ってから、まる三年になるわけです。」と述懐しているが、私が誰れの紹介もなしに、玄関先きに裸一貫、仁王立ちの著者と初対面してから三十数年になる。その間、私が校正を手伝ったことのある「ドレフュス事件」にはじまり、「ブランジェ將軍の悲劇」、そして「パナマ事件」におよぶ、つぎつぎの労作の発表をみた。私はひそかに大詰めのパリ・コミュニケーションはいつの日か、と心を燃やしていたのであるが、思えば永いながい年月にわたる待望であった。これだけの国家の運命をかけた問題に、中立があろう筈がなかった。したがって、左右両派の文献に偏狭がある。大仏次郎は文学者として自由に書いている。

こんどの完成で一番喜んだのは、日本社会運動の草分け堺利彦、山川均、荒畑寒村の先覚者たちではなかろうか。この長老たちは、パリ・コミュニケーションをもっと掘下げねばならぬと、つねづね口にしていたことを私は知っているからである。事実、あの人たちは「社会主義研究」あるいは他にペンをとり、明日のためにたたかう人たちの啓発につくした。そのうえ実践を忘れなかった。荒畑寒村先輩のご健在をいのる。荒畑さんはドレクリユウズが好きだった、と記憶している。

山川均先生は亡くなられる前、私に手紙を寄せられ、いつ会えるか、とのことであった。折返えし、こちらからお伺いしますと、お返事をしたのであるが、ある日ひょっこり見えられた。どんなご用かと思ったら、パリ・コミューンについての二三の質疑であった。あの当時の運動家たちは、苦心して学んだ語学をムダにしなかった。すでにリサガレエの「パリ・コムン史」を引用していた。英訳からだったろう。この本はレーニンはじめ、大勢によって、きつと引用されていて、いまや古典であるが、まだ日本には訳書がない。長老たちの、とことんまでの研究心は、とりつかれた執念といたいほどであった。私は、山川均先生のだしぬけのお訪ねに、かつ恐縮し、かつ自分の不勉強を恥じるのであった。

洋書輸入のある書店によると、近頃「パリ・コムン」のブームだということである。そういえば、この研究に取組んでいる、けなげな学生たちが多くなってきた。彼らの知りたがっていることの一つは、「何がこの内戦を失敗させたか。」その二は「コムューンはどんな社会的事業を実行しているか。」そして第三には「ジャコバンについて」である。

第一点についていえば、一八七〇―七一年代のフランスはヨーロッパにおける資本主義国として、大きな地位をしめていたとはいいいながら、その生産力は脆弱であり、手工業者、小商人、農民の比重は強く、したがって、プロレタリアの政治的訓練が育成されていなかった。レーニンが、「労働党が存在していなかった」と、いつているのは、このことである。

「不幸にも」と、マルクスが認めていたように、「フランスのインターナショナル分子は、(その多くはブルードン主義者であった)政治活動を棄権していたので」、工作の不備からして行動(すなわちコムューン)が、ちぐはぐ

になる結果となった。そういう状態であったから、労働者階級の尖鋭化もみられず、参加分子も少数であった。

また、エルゲルスはすでに一八七〇年、「九月四日の政変」が行われる前、八月十五日、これでは「いざという場合、真の革命が起ったとき、指導権をにぎる誰もいないことになる」と警告している。つまり、もっとも必要とした科学的社会主義に基いたプロレタリアの「前衛党」のなかったのが、大きな欠陥であったわけである。

そして、このことが一八七一年「三月十八日のパリコミューン」に事実となつてあらわれている。結果論かも知れないが、もしあの時、余勢をかってヴィノワ將軍のヴェルサイユ軍を追いつめていたら、一気に粉碎したろうと、見る向きもある。それによつて、コミューンの情勢も変つたことだろう。

コミューンの方針が確乎としていなかったことはフランス銀行を、その手によつて接收していなかった手ぬるさにも見られる。これはプロレタリア独裁によつて、重大なことであつた。

マルクスは、はっきりと書いている。

「経済的な点で、われ／＼の今日の觀念によればコミューンのせねばならなかつた多くのことが等閑視されていたことが、理解される。人々が、フランス銀行の門前で恭しくたち停まっていた時に示した、あの聖なる尊敬は、全く理解し難いところである。これは、また一つの重大な政治的過失でもあつた。コミューンの掌中に握られたフランス銀行——これは一万人の人質よりもヨリ多くの価値があつたのである。」（マルクス「フランスの内乱」木下半治

訳、一六六頁、岩波文庫版）

文学者大仏次郎は、フランス銀行のカラクリを分り易く、こう説明しているのである。

「フランス銀行は出来れば政府とともにヴェルサイユに逃亡したかったので、その機会も手段も失くして、リサ

ガレエが指摘した巨大な金を抱えてパリに取残されているものだった。頭取のルーランは逃亡して副頭取のド・ブルークが居残って銀行を防衛している。ティエールからひそかに作戦を教えられ、ヴェルサイユが承認した方法でコミューンの要求に対し、支払わないのではなく、小出しに分割払いした。味方しないのではないと信じさせて干渉の徹底を巧みに躬したのである。

……フランス銀行はヴェルサイユがパリと闘う為に銀行に対して振出した二億五千七百六十三万七千フランの手形に保証を与えた。リサガレエがフランス銀行の金をパリに在る人質の最たるもの、ヴェルサイユの生命線だと批評したのが、この意味である。パリに在って、フランス銀行はぬらりくらりと応接した。これは作戦行動であった。勝つ見込みの多い方に、巨額の投資をしたのである。コミューンは死なないで生きられるだけのものを貰って満足した。重大な過失で、五月敗北の理由の一つとなった。」「(パリ燃ゆ一下巻、一八八頁)

この他、非常時における無統制、未経験、党派争い、人間同士の軋轢など数えあげられるが、私はこれでとどめる。

第二点——パリ・コミューンの天下は、わずか二ヵ月足らずの短日月であったが、社会革新上、見るべきものが皆無ではなかった。最近フランスをはじめ、各方面において、その業績についての研究がすすめられ、とくにソ同盟において盛んであるときく。私はゲ・ペ・モロゾフ執筆、田中勇訳「パリの労働組合組織と一八七一年コミューン」(1)、(2)の一読をすすめたい。(『労働運動史研究』一九六二年七月並に九月号所載)。この論文はソ連科学アカデミー歴史部門機関誌「歴史の諸問題」誌、(一九六一年第三号)に所収の邦訳である。

さて、第三点のジャコバン派についてであるが、この派の前身というべき「ブルトン・クラブ」の結成をみたのは、大革命の起った一七八九年十月であった。一連の自由主義的革命分子たちが、パリ、サントノレ街に所在する

旧ジャコバン修道院を集会の場とし、「ブルトン・クラブ」と名づけた。その後いくたの消長があった。「憲法友の会」と改称したこともあるが、俗にジャコバンと呼ばれるようになった。

さらに、のち、バルナーヴ、デュポール、ラメット兄弟たちの穏健主義者たちは「フウィアン派」を形成して分離した。共和主義に踏みきった多数派ジャコバン分子たちは、ここを根城とし、いよいよ革命の本領を発揮した。かくて「ジャコバン・クラブ」は庶民と直結の場となった。中心人物はロベスピエールであった。

ロベスピエール、サン・ジュストたちは「熱月の政変」（一七九四年七月二十七日）で失脚し、断頭台の露と消えた。「ジャコバン・クラブ」は同年十一月十一日、反動のテルミドリアン（熱月派）によって閉鎖された。その後、「パンテオン・クラブ」が誕生したが、一七九九年、総裁政府によって決定的に解散された。しかし、ジャコバン精神は死滅したのではなかった。

ロベスピエールは生前、自らもペンをとり、地方の同志と連絡を密にすることを怠らなかった。国家危急にたいする認識を新たにさせるために、国民公会から地方に派遣されたおもなる代表者はジャコバンたちであった。中には悪徳の人間もいたが、正しい政治の在り方と、フランス革命の大精神を浸透させたのは彼らジャコバンであった。憂国の士たちは祖国のために死闘し、外敵を放逐したのであった。パリ・コミユンで息吹きを返えたのは、それらの子弟、ネオ・ジャコバンたちであった。

「ジャコビニズムとは、——と『フランス革命史』の著者マティエ教授がいう——それは一七九三年六月のパリ暴動から一七九四年七月の『熱月の政変』にいたる間の革命的政治の理念を実践した政治のことである。」そして、その核心となったのは公安委員会であった。

同年十月十日のことである。若冠サン・ジュストは公安委員会の命により、内外の破局にかんがみ、治安の挽回と徒党の制圧にかんする報告を国民公会でした。かれは「革命的法律が実施されるためには、政府それ自体が革命的に組織されねばならぬ」と単刀直入、非常措置の必要な理由を説明し、政府、食糧、保安、財政の十四カ条にわたる法案を提出した。

「第一条 フランスの臨時政府は平和到来の日まで革命政権とする。」——独裁政治であり、政治革命から社会革命への第一歩であった。

ただ、ロベスピエールによれば、恐怖政治を、共和国を支配する一般原理と無関係に採用された単なる弾圧的暴力と、考えるのは間違いであるというのである。

「恐怖政治は、すみやかな手酷しい峻厳な裁き以外のなにものでもない。したがって、それは徳性の発露である。それは、民主政治における特殊な方針というよりは、祖国のきわめてさし迫った要請に応じて採用された、その一般原理に基づいた結果である。」（J・L・タルモン著、市川泰治郎訳「フランス革命と左翼全体主義の源流」拓殖大学海外事情研究所版）

ジャコビニズムの独裁政治といい、恐怖政治といい、パリ・コミューンと同じ性格だったとはいえない。歴史の流れが、そうさせたのであろう。パリ・コミューンにおいては「プロレタリア革命」の前哨戦であったし、恐怖政治にいたっては、むしろ、ヴェルサイユのティエール政府に返上すべきであろうか。

もとより当時のフランス社会運動には、もろもろの流れがあった。だが、彼らが政敵ナポレオン三世が完敗したのに、なおかつ外国軍が国内に侵入をつづけるとなると、「国難来る！」のかけ声に諸派はいっせいに起ち上った。

これは大革命以来の国民性であり、この国の伝統なのである。こんどの戦争のレジスタンスに通じるものである。

運動の流れは大きく区別して三つに分けることができる。ジャコバンたち、ブランキスト、そしてインターナショナル派である。もちろん、その底流にブルードン主義者やエベルティストがいた。マルクスの思想を理解する運動家にいたってはほとんどなかったといつてよい。「コミューンは熱烈で真剣なイデオロギー的、感情的な潮流の産物であった。それは不統一で、しかも熱狂的な議会だった。そのメンバーの客観的な分類はそんなにやさしくはない。」（ジョルジュ・ブルジャン著、村上正訳「パリ・コミューン」白水社版）

これら色とりどりの分子たちは、極左的フラクションを形成していた。それは一八四八年革命の「老人組」だけではなかった。新らしい分子たちは、家族でいつもきかされた大革命の思い出話を子供心に知っている。いわば伝統的精神の持ち主であった。科学的社会主義によるのではなく、むしろ「伝承」の革命家であった。

彼らの多くは国民公会に祖先をもつか、そのつながりか、あるいは王政復古時代の結社「人民の友」とか、「人権協会」に関心をもったか、一八三〇年革命当時の秘密結社や「シャルボヌリ」（革命的共和主義運動）に味方した人びとである。

私は忘れもしないが、地方のある農家によばれた時のことであった。耳の遠いこの家の老人が、暖炉の前で孫を膝の上にのせていた。税金のことで村民たちが、こそこそ話合っているのに聴き耳をたてていたと思ったら、いきなり壁に向って起ち上り、目を光らかにして怒鳴った。「銃を下ろすんだ！」あの年寄が街頭へ飛びだす剣幕だった、あのときの光景を私はまざまざと思いだす。そんなジャコバンやエベルティストやバブーフの子孫なのである。

時世の流れである。それぞれのイデオロギー的立場から互に相容れぬものがあった。しかし、革命的共和主義者

であることにかけて変りがなかった。祖先が演じ、達しえなかった自由の大理想を実現するために実行主義を第一義とした。徳政や大言壮語は実質のともなわない旗じるしとみ、強力な政治、すなわち革命的独裁を信条とした。その上、崇高な犠牲的精神、すなわち革命のために生命をささげることをもって、彼らの本分とした。

ジャコバンの流れを汲み、ブランキーに共感をもった若き日のジョルジュ・クレマンソーは書いている。

「ゆるやかな世の移りかわりに、なんの期待ができよう。新らしい理想が平和のうちに、かちとれると思うのは、空論でしかない。」（『ル・トラヴァイユ』紙、一八六二年一月二十五日）

また、ブランキーから弁護士プロト、それにツールとともに新人として囑目されたトリドンは、「エベール派の歴史」を書いている異端派ブランキストであるが、そのかれがいつている。

「民主主義のすべての敗惨は力の勢を軽んじたところからきている。この力なくして、何ごととも成りたたない。自力によらずんば、何ものもおめおめ崩壊するものでない。」（トリドン著作集「一八九一年」）

過激な論法であったが、しかし彼らは、それを身をもって実践したのであった。

ドレクリュズとブランキーはイデオロギーの上で互にするどく対立したが、実力行使の意味で一致していた。

ブランキーの社会的プログラムは、独裁方式をバブーイズムから、産業組織をサン・シモン主義から、これら二つの影響をうけたものであるといわれる点で、古風なジャコバン型のドレクリュズの上をゆくものとされる。しかし、何よりもまづ国内の外敵を一掃するために決起し、敵軍の下僕になっているヴェルサイユ政府とたたかったことは、両者とも大革命のジャコバン型であった。

ドレクリュズはすでに開戦まもなく、ナポレオン三世の軍がプロイセン軍に敗北した際に、自ら主宰する紙上で

（「レヴエイユ」紙、一八七〇年八月五日）「労働者諸君！」に訴えている。政府が首都パリを「退散」しようとしている醜態に抗議せよというのである。

「食糧、軍事費その他不足の一切は労働によって「買戻」されるのだ。」

そして数日後、さらにパリ市民に叫んでいる。

「パリ市民諸君、**「国難来たる！」**」

外国軍はフランスに侵入している。敗戦につぐ敗戦である。パリに向って進軍する敵の襲来を阻止することは出来なからう。今こそ最後の決意を固めるときである。

パリはすでに一七九〇年フランスを救った。こんどもまた救うべきだ。

そのために何をなすべきか？ダンTONはいったではないか、**「大胆不敵たれ！」**」

やがて消滅すべき諸政府の上に、死滅しない国民が生きている。その国民は、大惨敗、裏切り、主脳者たちの犯した誤ちにもかかわらず、すべての遭難を乗り切ってきた。今こそ、この国民は新しい試練を打開するため、偉大な革命的試練の威力とエネルギーを示すときである。

起て、市民諸君！

武器をとれ！」（「レヴエイユ」紙、一八七〇年八月九日）

それから一ヵ月経っての九月七日、老ブランキーは「パトリ・アン・ダンジェ」紙（「国難」）を発刊した。この有名な新聞は同年十二月八日まで続き、通算八十九号を出している。創刊号に転載されたアピールは、さきに発表され、外敵を目前にした革命的各派は一致団結すべきだと主張したものであった。署名者は以下のメンバーで、

(バルザン、ブランキー、ブルーイエ、ブリドー、カリア、ウード、フロット、エゴワ、グランジエ、ラカンブル、ルブロー、レ・ルブロー、ピル、レニヤール、スール、トリドン、アンリ・ヴェルレ、ヴィルヌーヴ兄弟) ブランキーの直系ないしは同系の勢揃いであつた。

のちに老革命家は、国防政府の不信を怒かり、徹底抗戦のために、かれの紙上で聖職者の徴兵、コミューンの樹立、バリケードづくりをとなえた。

他方、すべての革命的勢力の結合を提唱したブランキーは「インターナショナル、パリ支部」の諸グループと接触をもつようになった。そして、かれの紙面をこれらのグループに解放した。それが実つて、これまで両者の間に根をはっていたわだかまりを、いくぶんでもほごするような機運をつくつた。そして前者には労働運動の大切なことを、たとえば手段にあるにしても、当面の社会改革の効用性について、留意すること、後者には社会運動の実践にあつて、「革命的情熱」をもつことについて互に感得するのに役立った。

エンゲルスはいつている。

「パリ・コミューンのメンバーの大多数はブランキストであり……国際労働者協会(インターナショナル)の大部分はブルードンの社会主義派の奉持者によって構成されていた。当時のブランキストたちは、総じて社会主義者であつたというより、革命的、プロレタリア的感覚によつたもので、その中のごく少数はドイツの科学的社会主義を理解していたヴァイヤンのおかげで、その諸原則の知識に到達したものである。」(エンゲルス「パリ・コミューン二十周年に際して」ロンドン、一八九一年三月十八日)

それらの少数者として、「パリ・コミューン」の著者ジョルジュ・ブルジャンのあげている人物は以下のようで

ある。

「インターナショナルの会員はより大きな団結力をもっており、大胆な非のうちどころのない労働者の使徒ヴァルラン、テイス、ハンガリー人のフランケル、バンディ、アシ、ルフランセー、B・マロン、シャラン、アヴリアル、アドルフ・クレマンズ、ウージュヌ・ジェラルダン、ランジュヴァン、エドゥアール・ヴァイヤンがこれに属していた。」

なお、同じ著者は述べている。

「コミューンのメンバーの多くは、先行する諸革命、とりわけフランス大革命、そのなかでも一七九三―九四の偉大な流れを継承しているものと思ひこんでいたし、また継承しようと欲していた……こうしてきわめて自然に、いろいろな状況も手つだつて、コミューンの中心には過激派の精神状態が形成された。政略家、旧クラブ会員、進歩的ジャーナリストたちによってジャコバン派のグループが形づくられ、このグループは急速にその優位を確立した。」

文筆家の急進はドレクリウズ、アルチュール・アルヌール、ヴェルモレルなどであった。ヴェテランのフィリックス・ピアも熱烈な抗戦派のチャンピオンであったが、人間としての性格から、とかくの非難があった。ぐつと穏健なのは「デモクラシー」紙のシャサンであった。かれはジュール・ヴァレス、ランなどと、かつての青年共和主義運動の推進力であり、老ルイ・ブラン、キネ、カンタグレル、アルフレット・ナケ、クリュズレなどかれの周辺にあった。かれの「デモクラシー」紙にはシャマレの国際労働者協会にかんする記事を取り入れ、コミューンの外交政策で活発な役割をし、ヴェルサイユ軍とのたたかいで悲劇的な死をとげたギユスターヴ・フルーランズもこれに寄稿している。

バクニーンはいう。

「コミューンの大多数のメンバーは純然たる社会主義者ではなかった。彼らをコミムナルにさせたのは、やむにやまれぬ引力、彼らの環境の風土から、彼らのおかれたポジションの必要上から、おさえきれない勢いかられたのであって、信念からきたものではなかった。

社会主義者たちは、きわめて少数で、十四、五名そこそこであった。その先頭に立ったのは、いうまでもなく、われらの友ヴァランであった。そのほかはジャコバンで構成されていた。

けれども、残念ながら、ジャコバンにもよりけりであった。弁護士、理屈屋、ガンベッタのようなものもあったし……折紙つきのジャコバン、一七九三年のデモクラシーの信念に忠実な英雄、この時代の最後の代表者たちもいた。彼らは、自分たちの良心を反動の傲慢の前に屈するよりは、むしろ彼らのこよなきものとした生命を、団結を権力を、革命のために捧げることが潔しとした。こうした高潔なジャコバンたちの先頭に、ドレクリウズがいた。大なる精神と器量の持主だったかれは、何よりもまづ革命の勝利を欲したのであった。」（J・ギョーム「インターナショナル、資料と回想」第二巻、一九〇七年、一六二頁）

ルイシャルル・ドレクリウズは、一八〇九年十月二日、ウール・エ・ロワール県、ドルウに生れた。かれはオーギスト・ブランキーとは六歳年少であった。ブランキーの父は生粋の国民公会派だったのにたいし、ドレクリウズの父は、電信員からドルウ警察署長になった。母はこちのカタリックであった。一八三〇年革命にいたく心に動揺をきたし、パリに向って故郷を去ったのは一八三二年末頃と思われる。かれの政治運動はここにはじまった。

一八三五年「ジュルナル・ド・シャルルロワ」紙、続いてヴァランシエヌの「アンパルシアル」紙に寄稿した（一

八四一―四八年)。一八四八年革命にはノール県およびパ・ド・カレエの政府委員、同年パリで「民主社会共和国」紙発刊、第二帝政では新聞法違反、秘密結社加入の廉で投獄、カエンヌに流刑に処された。一八六八年、パリに「レヴェイエユ」紙(「めざめ新聞」)を発刊し、ことごとに反帝政デモに参加した。一八七一年二月四日、セーヌ県から国民議会当選、ボルドウ政府の講和締結に反対した。一八七一年三月二十六日コミューン委員となり、外交、つぎに軍事を担当した。同年四月十八日、ドレクリウズは「レヴェイエユ・デュ・プーブル」(「人民の目ざめ」)を自己の機関紙として発刊したが五月二十二日廃刊の止むなきにいたった。通算二九号、一時、発行部数一万三千におよんだ。// 血の週間// 五月二十五日、バリケード戦で痛ましい死をとげた。

ドレクリウズはジャーナリスト肌の論客であった。著作としては見るべきものが少ない。その意味で、一八五九年かれの流刑時代の記録、「パリからカエンヌ」はその思想の一端を知るために貴重な資料であろう。幼時から母のきびしいカトリック教育をうけたドレクリウズが、一貫して反宗教教育のアンチ・コングレガニストであったことは、不思議であった。かれは教育の機会均等を強く主張しているが、「シャルル・ドレクリウズ伝」(一九五二年)の著者マルセル・デサルによると、この説はルイ十六世処刑の報復として暗殺されたルペルティエ・サンファルジョーが国民公会になした提案にのっとったものとされる。すなわち、もし教育がめいめいの天分に応じ、あらゆる程度において国家の完全な負担においてなされるならば、幼時から平等の洗礼のもとに、友愛の精神をうえつけられるだろう。教育はまた男女共学を基本とすべきであり、知的平等こそは、新らしい社会の理想的な人づくりであるとしたものであった。

ドレクリウズにかぎらず、当時の友愛の精神は、愛国心に通じるものであった。ブランキーにいわせると、

「忘れてはならぬ。来るべき日のひとがたたかうということは、一つの政府のためや、身分や党派のためや、名誉、原則、思想のためですらない。それは生きるということのため、みんなのため、人間であることの最も貴い表現である祖国のため」であった。(「パトリ・アン・ダンジェ」紙、一八七〇年九月八日)

病弱だったせい、一徹だったせい、自己にたいしてきびしく、控え目だったドレクリウズは、(それゆえかはコミューンにおいて軍事を担当させられることになったのだが)追放、流刑、投獄、ひとしく迫害の身のかれは、ブランキーにくらべて抱擁力がなかったといわれる。ドレクリウズは、かれと交わり深かったルドリュ・ロラシとともにブルードンから「こけおどしの古臭いジャコバン」またマルクスから「尻つぺたを叩いてやりたい思いあがりのジャコバン」とあしらわれた。しかし、かれは死ぬまでジャコバン魂を守りつづけた。その悲壮な最期について、いろいろと伝えられている。

「死の週間」一八七一年五月二十五日、覚悟をきめたドレクリウズは死の化粧をした。ヒゲをそり、さばさばしたかれは、金ボタンの光る派手なシャツを着た。黒いフロックコートにスプリングをまとったが、ボタンがきちんとかけられていた。しやれた短靴をはき、金の握りのついたステッキを手にした。

ドレクリウズは連盟兵の先頭に立ったが、後からついてくるこれらの味方に振り向きもせず、心もちステッキで身をささえながら、ヴォルテール通りの左側をすたすたと歩いた。途中、手車で運ばれてたりスボンヌに出会った。その少し先きでテーズとアヴリアルが、負傷しているヴェルモレルを支えていた。小隊が前進するにつれ、敵の射撃が激しくなった。リシャル・ノワール通りになると、味方の兵士たちは軒並にそって射撃態勢をとり、危険そうなところを駆け足で通った。

そんなことに頓着せず、ドレクリューズは平気で、すたすたと歩みつづけた。バリケード二十メートル前では、すでに人家が燃えていた。一緒にいた数人の兵は、危険であるからやめてくれるよう引きとめたが、かれはその中の何人かに握手をし、そのまま歩きつづけた。ひたむきにバリケード目ざして進み、その上によじ登るのである。かれはスプリングをぬぎすて、コミュニケーション委員であるしるしの金のフサのついた飾帯をまる見えにした。このとき一斉射撃がされたと思うと、あっというまに、ドレクリューズは古木のように倒れた。

同じ日、ドレクリューズは文士のジュール・ヴァレスに出会いがしらに声をかけた。「いよいよ、おさらばだね。」それから区役所で会ったフェレに、「疲れはてた」ともらした。精根つきた彼であった。おそらく、六十二歳の老革命家ドレクリューズが、最愛の姉アゼミアに宛てた日附無しの遺書は、そのとき書かれていたものであろう。

「姉上、

私は反動の勝利の被害者になるのも、玩具にされるのにも心外です。

一生を私のために捧げていただいたあなたよりおさきに、あの世に旅立つことをおゆるし下さい。

私には度重なる敗北のその上に、さらに敗北の浮き目にあう勇氣はありません。

愛するあなたに、つきない接吻をおくります。

あなたの思い出は、眠りにつく前の、私の最後の名残りとなるでしょう。

あわれな母上が亡くなられてから、私にとってたった一つの家族だった、姉上よ、

さらば、さらば！

最後の一瞬まであなたを愛する弟、

C・H・ドレクリューズ」